

論文内容要旨

日タイ語における自称詞の認知言語学的対照研究

東北大学大学院国際文化研究科
国際文化研究専攻

Siriacha Roykaew

指導教員 上原 聡 教授
指導教員 江藤 裕之 教授

日タイ語における自称詞の認知言語学的対照研究

国際文化研究専攻

Siriacha Roykaew

1. 研究の背景及び目的

いかなる言語においても話し手が自分自身を言及するために用いる表現があるが、言語によってその性格が異なっている。日本語の「話し手が自分を指す言葉」には「私」や「僕」、「おれ」などの他にも、親族名称、職業名称、固有名詞、指示詞など様々なバリエーションがある。鈴木（1973: 146）は、この日本語の特徴を踏まえ、話し手が自分自身に言及するすべての言葉を「自称詞」と総称している。一方、タイ語の自称詞においても日本語と同じように、様々なバリエーションがある。

また、日本語とタイ語の両言語とも自称詞の明示は義務的ではないため、文脈から明らかかな場合は自称詞を省略することが可能である。例えば、英語の“I love you”を日本語で言う場合、一般的には「愛して（い）るよ」など自称詞を明示しない方が自然であろう。タイ語も自称詞を明示せずに“rák（愛する）ná（終助詞）”のみでも可能である。

このように、無形を含め自称詞の選択肢が同じように豊かでありながら、社会背景や歴史が異なる日本語とタイ語の間の翻訳においては、自称詞の用法に違いはあるのだろうか。あるとすれば、どのような違いだろうか。

本研究では、全く同じ文脈において日本語とタイ語の自称詞にはどのような対応関係があるのかを調べるために、日タイ対訳コーパスを用いて、両言語における自称詞の共通点と相違点を明らかにする。両言語における自称詞の使用実態を明らかにした上で、認知言語学の観点からその相違点はどのような原理に基づくものであるかを体系的かつ客観的に解明することを目的とする。

2. 先行研究及び本研究の研究課題

これまで、日本語とタイ語、それぞれの言語についての自称詞に関する研究は多く行われてきたが、日本語とタイ語を対照した自称詞の研究はまだ限られている。その上、それらの研究では、自称詞の出現数と自称詞の種類を別々に考察したものは多い。それに対して、役割語の観点から考察したものは極めて少ない。自称詞の出現数に関しては Uehara

(2012) やルンキーラティクン (2017) などが挙げられる。両者とも日本語はタイ語より自称詞の非明示数が多いことを報告している。その背景について、Uehara (2012) は日本語ではタイ語にはない内的状態述語による人称制限があるため、自称詞が明示されないことが多いと指摘している。一方、ルンキーラティクン (2017) は授受表現、希望・要求・感情を表す表現などの文法形式の違い以外に、社会的な要因もあると指摘している。しかし、後述するように、他の要因も考えられるため、さらに検討する必要がある。

自称詞の種類に関する研究には Chirasombutt (1995) やケエンチャック (1989) などが挙げられる。両者とも日タイ語における自称詞の種類についてそれぞれの言語の用法や特徴を報告しているが、その背景や出現数との相関関係については十分に論じられておらず、タイ語では目下の親族名称を自称詞として使用できるが、日本語では使用できない点についても明らかにされていない。

役割語に関して、日本語では「ぼく」、「おれ」、「わたし」、「あたし」などの自称詞は明確な人物像と結びついている (金水 2003)。同じくタイ語も自称詞の種類が豊かであり、日↔タイ対訳作品において二言語の間にいかなる対応関係があるかという点は興味深い。しかしながら、これまでの研究には日↔タイ対訳コーパスを用いて、双方向的な考察したものが見あたらない。

このように、同じ文脈において日本語とタイ語の自称詞の対応関係とその異同の背景についてまだ十分に論じられていないことが分かった。そこで、本研究では、先行研究の問題点を踏まえ、本研究の研究課題を以下の通りに設定する。

- ①客観的に同じ文脈において、日本語とタイ語の自称詞の出現数の差異は先行研究と同じようにタイ語の方が多いか。その背景には先行研究で指摘されたこと以外には何かあるか。
- ②日本語とタイ語における人称名詞・親族名称・固有名詞・指示詞などといった各自称詞の種類の出現数とその用法の違いと背景は何か。
- ③共に人称名詞系自称詞¹の種類が豊富である日本語とタイ語の間では、対訳コーパスにおいて各自称詞にはどのような対応関係があるか。役割語の観点から考察を行った場合、それぞれの言語の人称名詞系自称詞の特徴とその背景は何か。

¹ 後述するように、本研究では日本語とタイ語の特徴を考慮し、一人称代名詞を人称名詞系自称詞と称する。

3. 研究方法及び用語の定義

3.1 研究方法

本研究では、同じ文脈・状況において自称詞がどのような言語形式で表現されるかを調べるための対訳資料をデータベース化し、両言語の構文を比較できるように一文ごとに対訳コーパスを作成する。会話文に出現した自称詞の単数形を収集し、日本語とタイ語の自称詞の出現数と種類を調べて考察する。なお、データを収集する際は次のように分類する。

①置き換え：原作では自称詞が使用され、その翻訳版もそれに対応する自称詞が使用されている場合。

②追加：原作では自称詞が使用されていないが、その翻訳版では使用されている場合。

③省略：原作では自称詞が使用されているが、その翻訳版では使用されていない場合。

なお、本研究では日本語とタイ語における自称詞の対応関係を考察するため、両言語とも自称詞が非明示になった場合は分析の対象外とする。

本研究では自称詞の分析に際して、対話者間の全体的な人間関係、話の流れを観察・把握できるように短編小説を主データ²として使用する。また、両言語の特徴が見られるように、日本語の原作とそのタイ語訳のみならず、タイ語の原作とその日本語訳も取り入れ、相互的に考察する（日本語原作：10話・タイ語原作：10話、合計：20話³）。なお、資料を選ぶ基準は次の通りとする。

①原作を選ぶ際、著名な作家で、一般に知られている作品を選ぶ。

②翻訳を選ぶ際、可能な限り、様々な訳者からの作品を取り入れる。

③資料が決まったら、次の基準に従い、データを収集する。

i. 日本語が原作の場合はタイでよく知られている 10 冊のタイ語訳短編集で各冊 1 話ずつ最も自称詞が多い作品を選ぶ。

ii. タイ語が原作の場合は、日本語に訳されているものの数が限られている中で、会話文の見られる 5 冊の和訳短編集の中から、それぞれ最も自称詞が多い作品を 2 話ずつ選ぶ。

そして、収集したデータに基づき、日本語とタイ語の自称詞の出現数と種類とその対

² 必要に応じて、以上で挙げた 20 話の短編小説以外の作品も取り入れる。また、両言語における「役割語」の特徴を観察する際、補助資料として、日本語漫画とそのタイ語訳も取り入れて考察する。

³ 紙幅の関係上、扱った作品の詳細は博士論文の後付を参照されたい。

応関係を調べ、それぞれの言語の特徴を明らかにする。その後、認知言語学の理論的枠組みを用い、日本語とタイ語における自称詞の用法の違いの背景を考察する。

3.2 用語の定義

前述したように、鈴木（1973: 146）は自称詞を「話し手が自分自身を言及するすべての表現である」と定義している。しかし、この意味では、指示機能のみならず、述定機能も含んでいる。例えば、「(私は) 山田の妹です」では「妹」まで自称詞に含まれることになる。

そこで、本研究ではこのような述定機能にある用法は対象外とし、自称詞を「話し手が自分自身を言及するのに用いる指示機能において使用される全ての表現」と定義する。また、自称詞の分類については先行研究を踏まえ、日本語とタイ語の特徴を考慮し、次の通り下位分類する。

- ①人称名詞系自称詞⁴
- ②親族名称系自称詞
- ③固有名詞系自称詞
- ④役割・職業名称系自称詞
- ⑤指示詞系自称詞
- ⑥名詞句系自称詞
- ⑦無形（自称詞が非明示になった場合）

4. 研究の結果と考察

4.1 日本語とタイ語の自称詞における出現数

下記の表 1 で示す通り、原作は日本語タイ語を問わず、全て 20 作品の対訳資料のデータにおいて自称詞の出現数は日本語よりタイ語の方が多くなることが明らかになった。

表 1 日本語とタイ語における自称詞の出現数：作品別

日本語原作の作品	日本語	タイ語	タイ語原作の作品	日本語	タイ語
ゼロ弾きのゴーシュ	24	45	チャムプーン	145	159
ヴィヨンの妻	54	94	暗闇の隅	198	208
三つの宝	67	80	僧子虎鶏虫のゲーム	24	49
厭がらせ年齢	53	87	旧友の呼び声	120	237

⁴ 本研究では、性質が異なる英語など西洋語の（一人称）「代名詞」と区別するため、田窪（1997）の「人称名詞」に基づき、人称名詞系自称詞と称する。

山椒大夫	62	94	本当の死	158	227
高瀬舟	39	64	いとこ	33	54
角筈にて	57	143	二十九番目の人間	13	28
我らの時代の フォークロア	141	204	エムオン娘のひたすら な愛	105	144
卒業	14	17	人に頼らず	36	57
なみうちぎわ	59	90	トマトの自殺	9	29
明示	570	918	明示	841	1192
非明示	369	21	非明示	408	57
合計	939	939	合計	1249	1249

上記の表 1 の通り、原作の日本語で自称詞が非明示である場合、タイ語訳では自称詞が追加され、一方で、原作のタイ語で自称詞が明示されている場合、日本語訳では自称詞が省略される傾向がある。この結果を合わせて全体の日本語とタイ語の明示数と非明示数を割合で表すと、下記の図 1 のようになる。

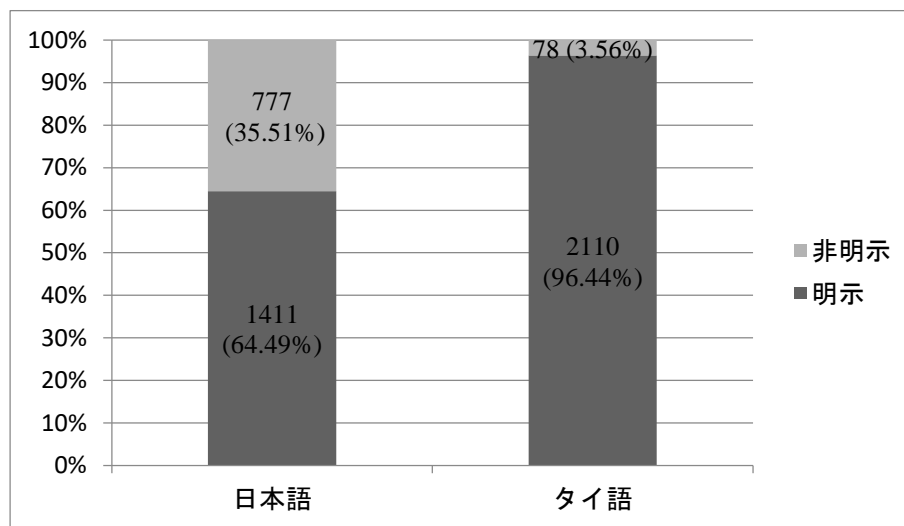


図 1 全体の日タイ語における自称詞の明示と非明示の割合

図 1 が示している通り、日本語では自称詞が明示されていないが、タイ語では明示されている場合は 777 例であるのに対し、タイ語では自称詞が明示されていないが、日本語では明示されている場合は 78 例であり、日本語の自称詞の非明示はタイ語の自称詞の非明示を大きく上回っている。本研究では、日本語とタイ語の自称詞の出現数の差の要因に関して、日本語では自称詞が非明示であるにも関わらず、タイ語では明示化された事例に着目して考察する。

4.1.1 日本語とタイ語における自称詞の出現数の差の要因

原作の日本語で自称詞が非明示である場合、タイ語訳では自称詞が明示された事例及び、

原作のタイ語で自称詞が明示された場合、日本語訳では自称詞が非明示である事例に関して様々な要因が関わっている。本研究では主な要因として次のようなものがあると主張した。

① 文法形式の違いによるもの

いくつかの日本語の文法形式の特徴から、日本語では話者が安易に特定できるため、タイ語に比べ、自称詞が非明示になることが多い。本研究では、上原（2016a）の言語対照のための主観性表現の類型を踏まえた結果、日本語とタイ語の間に違いが見られるのは体験者主観性表現、情意者主観性表現、認識者主観性表現である。

② 好まれている言い回しの違い（状況中心的言語／人間中心的言語）によるもの

好んで使用されている表現ないし構文は日本語と英語では異なり、日本語は状況中心的言語であるのに対し、英語では人間中心的言語であると本多（2005）が指摘している。収集したデータを見ると日本語では自称詞が非明示というより、最初から言語化されていない、すなわち、状況表現が多く用いられている。それに対し、タイ語は英語と似ており、人間の動作が重視され、人間中心的表現の使用が一般的であることが分かった。また、状況中心的言語は主観的把握に対応しているのに対し、人間中心的言語は客観的把握に対応していることから、それぞれの言語の捉え方の違いにも繋がっている。

③ 社会・文化の違いによるもの

1) 自称詞の意味の違い：いくつかの一般に使用されているタイ語の自称詞の由来と意味は自分をへりくだるのに対し、「僕」をはじめ、日本語の自称詞は最初、自分を卑下する意味をもっているものの、使用が頻繁になるにつれて、その意味を失うことがある（鈴木 1975: 23）。この違いは 2) における両言語の自称詞の機能の違いにも繋がる。

2) 自称詞の機能の違い：日本語では必要とされていない限り、自称詞を明示しないことが多い（鈴木 1973）。一方、タイ語では、自称詞で話し手と聞き手の関係を示すことができるため、聞き手に相応しい自称詞を明示した方が丁寧とされている。

3) ウチとソトの概念の有無：親族について話すとき、日本語では「ウチとソト」の概念があるため、自称詞が非明示であっても、聞き手の親族のことか自分の親族のことが分かる。これに対し、タイ語では同じような概念がないため、自分の親族だと分かるように自称詞が明示されることが多い（ルンキーラティクン 2017）。

4.1.2 認知言語学の観点から見た日タイ語の自称詞の出現数の差異の背景

日本語では自称詞が明示されていないにもかかわらず、タイ語では自称詞が明示され

ている現象をさらに見ていくと、この差異は両言語による事態の捉え方の違いを反映していることが分かった。

Langacker (1985: 140) は、“Implicit reference to the speaker correlates with the speaker being construed more subjectively,....”と述べており、以下の例を挙げている。

- (1) a. Ed Klima is sitting across the table from me.
- b. Ed Klima is sitting across the table.

上記の例 (1) は一つの言語内での二つの表現の立ち位置の違いを示す例であるが、日本語とタイ語の自称詞の明示・非明示の現象をはじめ、言語が違う場合でも、同じ原理で説明できる。言い換えれば、上記のように、自称詞の明示・非明示は、それぞれ認知言語学における〈客観的把握〉と〈主観的把握〉に関わっている。日本語とタイ語における出現数の差異の背景においてもこの事態把握の違いに繋がっているということである。本研究のデータを見ると、同じ状況において、日本語は話者を規定する文法形式で自称詞が非明示になることが多いが、タイ語訳では自称詞が明示される傾向が強い。このことから日本語は〈主観的把握〉を好み、タイ語は〈客観的把握〉を好む傾向になることが分かった。

4.2 日本語とタイ語の自称詞における種類

これまで Langacker (1985) の理論を踏まえ、日英語の話者の明示・非明示についての分析が多く行われてきた (Uehara 1998; 池上 2003; 本多 2005 など)。用語や詳細は研究者によって異なっているが、共通して、これらの研究において話者が明示される場合の例文はほとんど一人称代名詞 (本研究のいう人称名詞系自称詞) である。また、結論としては話者の言語化が義務的である英語は「傍観者型の捉え方」が優勢であるのに対し、話者を非明示にするのが一般的である日本語では「体験者型の捉え方」が優勢であるとされている。しかしながら、Langacker (1985: 126) では、subjectivity scale について、下記の (2) を挙げ、subjectivity が低い順から(2a-c) という順番になっているとしている。

- (2) a. The person uttering this sentence doesn't really know.
- b. I don't really know.
- c. Don't really know.

(2b) が (2a) より **subjectivity** の度合が高いということは、話者が明示されている場合でも、用いられる表現によって **subjectivity** の度合は変わるということである。それでは、日本語とタイ語のように、自称詞の種類が豊かである言語では自称詞の種類によって **subjectivity** の度合に差があるのであろうか。また、両言語の間では自称詞の種類によって差があるのであろうか。

まず日本語とタイ語の自称詞の種類による出現数とその対応関係は以下の通りである。

表 2 日タイ語対訳コーパスにおける自称詞の対応関係の結果（種類と出現数）

自称詞の種類	固有名詞	親族名称	名詞句	人称名詞	指示詞	明示計	非明示	対応のペア計
	日/タ	日/タ	日/タ	日/タ	日/タ	日/タ	日/タ	
出現数	3/132	49/264	8/16	1340/1692	11/6	1411/2110	777/78	2188
%	0.13/6.03	2.23/12.06	0.36/0.73	61.2/77.33	0.50/0.27	64.4/96.44	35.5/3.56	100

表 2 の通り、有形の場合を自称詞の種類ごとに分けると、両言語とも人称名詞系自称詞だけでなく、固有名詞、親族名称、名詞句、指示詞が使用されていることが収集したデータから分かった。

4.2.1 日タイ語の自称詞の種類における **subjectivity scale** の応用

上記の通り、Langacker (1985)によれば、自称詞が明示される場合、自称詞の種類によって **subjectivity** の差がある。本研究では、Langacker (1985)に言及されていない指示詞と固有名詞を加え、日本語とタイ語に応用できるように、**subjectivity scale** を整理した。その結果を図で表すと、次の図 2 のようになる。

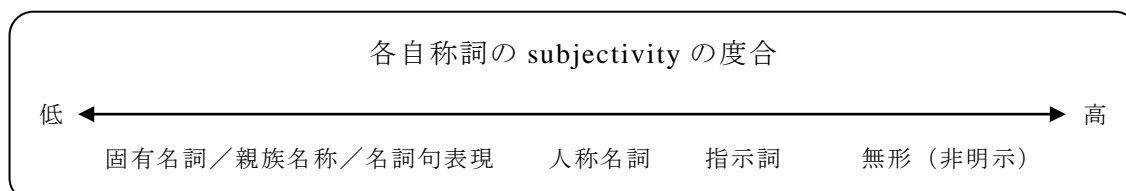


図 2 Langacker (1985) に基づいた自称詞の種類による **subjectivity scale**

図 2 の通り、直示である指示詞と人称名詞は、三人称ともなる固有名詞、親族名称、名

詞句表より **subjectivity** の度合が高い⁵。上述の表 2 日タイ語対訳データにおける自称詞の種類に対応関係の結果（表 2）を図 3 の **subjectivity scale** に合わせて考察すると、この自称詞の種類による **subjectivity** の度合の差は日タイ語における各自称詞の出現数の差にも反映していることが明らかになった。

すなわち、自称詞を明示化したものの中で、固有名詞、親族名称、名詞句表現、人称名詞といった **objectivity** の度合の高いものがタイ語に多く、**subjectivity** の度合が高い指示詞と無形は日本語の方が多いたことが明らかになった。そして、この結果は日本語とタイ語それぞれの言語の「捉え方」の特徴に繋がっていることが分かった。

ちなみに、日本語とタイ語は両言語とも親族名称を自称詞として使用することが可能であるが、日本語では、「子ども」、「妹」、「孫」など目下（下位者）の親族名称を自称詞として使用することができない。この背景の違いは両言語における聞き手の視点の取りやすさと関わっている（スィリアチャー・上原 2018）。日本語では聞き手の視点を取るときは目下（下位者）親族名称の視点のみであり、上位者の視点を取って「子ども」などを自称詞として使用することができない。また、日本語では目下（下位者）が成長すると、人称名詞に変わることが多いことも大人になると目下（下位者）だと捉えにくくなるからであると言える。このことから、日本語は話者中心性が強いのに対し、タイ語は聞き手中心性が強いというそれぞれの言語の特徴づけができる。その上、この捉え方の違いはこの論点である日タイ語の自称詞における **subjectivity** の度合の違いに帰着することができる。つまり、〈話し手中心性が強い〉言語は **subjectivity** の度合が高いことになり、〈聞き手中心性が強い〉言語は **subjectivity** の度合が低いのである。

4.3 日本語とタイ語における人称名詞系自称詞

上記では、日本語とタイ語における自称詞の明示・非明示と自称詞の種類・出現数の相関関係について見てきた。しかし、日本語とタイ語は同じく人称名詞系自称詞の種類が多いため、両言語の間にはどのような対応関係があるか、それぞれの人称名詞系自称詞の役割語の特徴は何かという疑問が生じる。本研究では収集した短編小説のデータと、追加資料として取り入れた日本の漫画とそのタイ語訳を用いて考察する⁶。

⁵ 詳細の分析は博士論文の第 5 章を参照されたい。

⁶ 本研究では、翻訳と役割語の視点から日本語とタイ語における対訳資料の分析方法で、それぞれの言語における役割語の特徴を考察する。また、両言語における役割語の特徴を考察する際、性別、年齢・世代、性格、職業・階層、地域、時代といった特徴に分類する。

4.3.1 データから見られた日タイ語の人称名詞系自称詞とその役割語の特徴

短編小説のデータに見られた日タイ語の人称名詞系自称詞は以下の通りである。

日本語：ぼく、おれ、あたし、わし、おれさま、おら、わたし、わたくし、うち

タイ語：phôm, chǎn, kuu, khâa, kràphôm, dichǎn, raw, nûu, ichǎn, ?àattàmaa, ?uá

全体的に両言語の人称名詞系自称詞を見ると、日本語では話者の「性格」を表す役割語が多く見られるのに対し、タイ語では話者の「性別」を表す役割語は多く見られるが、「性格」を表す役割語はほとんど見られない。また、タイ語の人称名詞系自称詞の用法では、聞き手による使い分けが特徴的である。つまり、話者のイメージを表わすより待遇表現としての働きが特徴的である。さらに、日タイ語の人称名詞系自称詞の対応関係を見ると、明確な人物像と結びつく日本語の「わたし」、「あたし」、「わし」の三つとも、タイ語の文学作品に多く使用されている男女とも用いられる役割語の特徴が見られない“chǎn”と最も多く対応している。全ての作品を通して、全体的にみると日本語では登場人物の性格によって人称名詞系自称詞の使い分けがあるのに対し、タイ語ではそのような傾向はあまり見られないと言える。

さらに、役割語がよく使用されている日本の漫画⁷とそのタイ語版を調べた。その結果、日本語ではそれぞれの人称名詞系自称詞は話し手の性別・性格を示唆しており、かなり明確な人物像と結びついている。例えば、『ドラえもん』ののび太が用いる「ぼく」は〈弱々しい男〉、『ドラゴンボール』の孫悟空が用いる「おら」は〈純粋な田舎者〉、『ワンピース』のルフィが用いる「おれ」は〈野性的な男〉、『るろうに剣心』の緋村剣心が用いる「拙者」は〈武士〉を想起させることが確認できた (Siriacha 2015)。一方、対応しているタイ語では、「拙者」に対応する“khâa nǒy”を除けば、聞き手が友だちの場合には、全て“chǎn”になっており、両親など目上に話す場合にはより丁寧な自称詞に移行するケースが多い。このように、漫画の場合でも短編小説の結果と同じ傾向にあり、日本語の人称名詞系自称詞は話者のイメージを表わす役割語としての働きが優勢であるのに対し、タイ語の人称名詞系自称詞は待遇表現としての働きが優勢であると言えよう。

4.3.2 認知言語学の観点から見た日タイ語の人称名詞系自称詞の特徴の差異

上記の日本語とタイ語における役割語の違いはそれぞれのコミュニケーションのスタイルの違いに繋がると考えられる。日本語の談話は独話的〈モノローグ〉である (池上 2000: 353)。日本人は聞き手がいても、独り言のような言い方して、聞き手に察しもらう

⁷ 資料とした漫画の詳細とその選定基準は博士論文を参照されたい。

ことが多い。一方、タイ語では、対話的〈ダイアログ〉であり、独話のときと対話のときが区別されている。このことについて、上原（2016b: 84-85）は日本語とタイ語の「痛み」を表す語彙を取り上げて説明している。

場面（A）：新米看護婦の下手な注射を受けて痛みを感じ、その看護婦に：

日本語：痛い（よ）！ タイ語：cèp

場面（B）：1人で道を歩いていて何かに躓いて倒れ、脚に痛みを感じて：

日本語：痛（い）！ タイ語：*cèp

日本語の「痛（い）」は、他者への伝達を目的とした描写モード（A）でも、独り言を含む詠嘆モード（B）でも使うことが可能であるが、タイ語の cèp（痛い）は、描写モード（A）でのみ使用が可能で、詠嘆モード（B）での使用は不自然である（上原 2016b: 84）。このように、日本語は〈モノログ、独話的〉であるのに対して、タイ語はその形式が聞き手を想定した表現になっており、〈ダイアログ、対話的〉であると上原（2016b）は指摘している。

この原理は日本語とタイ語の人称名詞系自称詞における役割語の特徴にも適用することができる。つまり、日本語は〈独話的〉であり、登場人物の画像を提示すると、自分を登場人物に自己同一化を行い、その登場人物はどのような人なのか、どのような人だと思われたいかを考えて人称名詞系自称詞を選択する。一方、タイ語は〈対話的〉であるため、常に聞き手は誰なのかを意識しながら、聞き手に相応しい人称名詞系自称詞を選択する。このことは Siriacha（2015）の、登場人物の画像を提示し登場人物が使用しそうな自称詞を問い、自由記述させたアンケート調査の結果にも合致している。

さらに、このコミュニケーションのスタイルの違いは事態把握の違いに関わっている。つまり、〈主観的把握〉は〈独話的〉なコミュニケーションスタイルに対応しやすいのに対し、〈客観的把握〉は〈対話的〉なコミュニケーションスタイルに対応しやすいのである。

5. 結論

本研究の結論は以下の通りにまとめることができる。

①日本語とタイ語は両言語とも自称詞の明示は義務的ではない。それにもかかわらず、

同じ文脈において、タイ語の方が自称詞の出現数は日本語より明らかに多いことが確認できた。その背景には先行研究が指摘している文法形式上の違い、社会・文化の違いの他、言い回しの好みの違いも1つの要因であると考えられる。また、文法形式の違いと言い回しの好みの違いについては、両言語の「捉え方の違い」が関わっている。つまり、日本語は〈主観的把握〉を好み、タイ語は〈客観的把握〉を好む傾向を示していると言える。

②本研究では日本語とタイ語の自称詞に応用できるよう、英語を基準とした Langacker (1985) の *subjectivity scale* を整理し、細分化した。その結果、日本語とタイ語における自称詞の種類による *subjectivity* の度合の差が明らかになり、自称詞の明示化したものの中で、*subjectivity* の度合が高いものは日本語に多く *objectivity* の度合が高いものはタイ語の方が多いことが分かった。また、この両言語の各自称詞の種類の出現数の差異は両言語の「捉え方」の違いを反映している。さらに、親族名称系自称詞について、目下（下位者）の者の親族名称の使用の違いは両言語における聞き手の視点の取りやすさに関わっていることが分かった。これらは本研究が明らかにした新知見である。

③同じく人称名詞系自称詞の種類が豊富である日本語とタイ語の間では、対訳コーパスにおいてどのような対応関係があるのかについて、日タイ対訳の小説と漫画を資料として、役割語に焦点を当てて両言語の人称名詞系自称詞を考察した。その結果、タイ語にも役割語があるが、全体的に見ると、日本語では、登場人物の性格を表す人称名詞系自称詞が特徴的であるのに対し、タイ語では、登場人物の聞き手が重視されており、聞き手によって自称詞が変わることが特徴的であることが分かった。この現象の背景に関しても、認知言語学の概念で説明できる。つまり、日本語は〈独話的〉であるのに対し、タイ語は〈対話的〉である。そのため、日本語では登場人物に自称詞を使用させる際に、その登場人物はどのような人なのかを考え、登場人物に自称詞を使用させる。一方、タイ語では、日本語のように登場人物のイメージで自称詞を選択するよりも、その登場人物の聞き手は誰なのかを考えながら、自称詞を選択するということである。

6. 研究意義と今後の課題

本研究の意義は以下の通りである。

まず、理論的意義である。「捉え方の違い」に関する認知言語学の理論を使用することによって、日本語とタイ語における両言語間の自称詞の違いの背景を特徴づけることができることを明らかにした点である。また、これまでの自称詞に関する日英の対照研究は数多くあるが、英語の自称詞の性質は日本語と異なるため、対照には無理のある部分もある。しかし、同じく自称詞の非明示が可能であり、自称詞の種類が豊富である日本語とタイ語の対照研究によって、今後の言語類型論の研究の展開に繋がる議論を行うことができた。

また、本研究の成果を応用することにより、日本語とタイ語の間でより正確で、かつ作者の意図する繊細な意味合いを伝達することのできる翻訳の一助となるなど日タイ語翻訳への貢献ができる。

本研究の限界は以下の通りである。

本研究の研究対象は自称詞の単数形であるが、今後はデータをさらに増やし、複数形も検討する必要がある。また、今回扱えなかった役割・職業名称系自称詞も取り入れ、両言語の自称詞の使用に影響する他の要因についても考慮する必要もある。subjectivity scale の分析に関して、Langacker (1985) には言及されなかった固有名詞、親族名称、説明的名詞句の間の差についてもさらに考察していきたい。最後に、本研究では役割語について人称名詞系自称詞に絞って考察したが、両言語の文末表現においても役割語の特徴が観察されるため、人称名詞系自称詞と併せて考察することが望ましい。これらは今後の課題とする。

引用文献

池上嘉彦 (2000) 『「日本語論」への招待』 講談社。

池上嘉彦 (2003) 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標 (1)」 山梨正明他 (編) 『認知言語学論考』 3, ひつじ書房, 1-49.

上原聡 (2016a) 「言語対照のための主観性表現の類型試案—日本語を題材として—」 『東北大学言語文化教育センター年報』 1, 東北大学高等教養教育学生支援機構, 33-43.

上原聡 (2016b) 「ラネカーの subjectivity 理論における「主体性」と「主観性」—言語類型論の観点から—」 中村芳久・上原聡 (編) 『ラネカーの(間)主観性とその展開』 開拓社, 53-89.

金水敏 (2003) 『〈もっと知りたい!日本語〉 ヴァーチャル日本語役割語の謎』 岩波書店.
ケエンチャック, カノックポーン (1989) 「タイ語と日本語の人物呼称の用法に関する対

- 照研究』『待兼山論叢』23, 61–78.
- スイリアチャー, ロイケオ・上原聡 (2018) 「日タイ語の親族名称の用法に関する認知言語学的一考察—親族名称系自称詞に注目したケーススタディー」『日本認知言語学会論文集』18, 293–305.
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』岩波書店.
- 鈴木孝夫 (1975) 『ことばと社会』中公叢書.
- 本多啓 (2005) 『アフォーダンスの認知意味論—生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- ルンキーラティクン, カノック (2017) 『社会言語学の観点から見る日本語とタイ語における人称詞の使用・不使用』東京学芸大学博士論文.
- Chirasombutti, Vorarudhi (1995) *Self-Reference in Japanese and Thai: A Comparative Study* (Doctoral dissertation) Australian National University, Australia.
- Langacker, Ronald (1985) “Observations and speculations on subjectivity” In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, Amsterdam, John Benjamins, 109–150.
- Siriacha, Roykaew (2016) 「日本語とタイ語の自称詞の対象研究—認知言語学の観点から見た出現数と種類の差異—」『国際文化研究』23, 31–44.
- Uehara, Satoshi (2012) “The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspective: Zero 1st person pronouns in English, Thai and Japanese” Tadao Miyamoto, et al. (eds.) *Typological Studies on Languages in Thailand and Japan (Hituzi Linguistics in English 19)*, Hituzi Syobo, Tokyo, 119–135.
- Uehara, Satoshi (1998) “Pronoun drop and perspective in Japanese,” Noriko Akatsuka, et al. (eds.) *Japanese/Korean linguistics 7*, 275–289.

論文審査の結果の要旨

学位の種類	博士（国際文化）	氏名	ロイケオ スィリアチャー
学位論文の 題名	日タイ語における自称詞の認知言語学的対照研究		
論文審査担当者氏名 (主査) 上原 聡, 江藤 裕之, 佐藤 勢紀子, 宮本 正夫			
論文審査の結果の要旨（1,000字内外） <p>本研究は、日本語とタイ語における自称詞、すなわち一人称代名詞を含む話者を指示対象とする全ての表現について、その使用実態と両言語に特徴的な使い分けの原理を、対照的に記述研究したものである。執筆者は日本語のように代名詞が非明示となる、いわゆる「省略」も自称詞用法の一つとして考察の対象に加え、理論的枠組に、話者に対する指示表現が言語主体の事態把握を表すとする認知言語学の概念を多く援用している。</p> <p>事態把握の言語間差異の研究では、日本語が英語等の言語構造上対照的な言語との対比で議論されることが多く、代名詞が「省略」可能な言語間での包括的な対照研究はなされて来なかった。日タイ語は類型論的に同種の代名詞省略型言語に属し、話者指示表現として代名詞・非明示の外、親族名称・指示詞・固有名詞等が用いられる点に於いても共通しており、その意味で本研究は従来の類型論的研究の間隙を埋めるものである。</p> <p>論文では、第1～3章で先行研究の問題点・本研究の目的や課題、対訳コーパスを用いた研究方法を明らかにした上で、続く第4～6章でそれぞれ日タイ語の自称詞の用法を3つの様相に分けて分析・考察を行った。即ち、第4章では、自称詞の明示・非明示の使用割合、第5章では、自称詞が明示された場合の代名詞か指示詞かといった使用形式の種類、更に第6章では、一人称代名詞の場合の両言語にそれぞれ複数存在する形式内の選択原理に関して、それぞれ日タイ語間対訳コーパスという実際の言語使用の膨大な資料に基づき、各形式の使用頻度、使い分けの文脈状況及び両言語間の対応関係を厳密に調査した。その結果として以下の特筆すべき成果を上げている。</p> <p>第一に、原作の言語を問わず自称詞の明示される割合が日本語はタイ語の2/3と少ないことを明らかにし、日本語の方が非明示が多いという先行研究の結果を確認した上で、両者の差を生み出す要因に事態把握の傾向の違いに関わる新たな要因を加え、両言語の明示・非明示の要因を総括的に究明した。第二に、自称詞間の使い分けの実態の説明に認知言語学における subjectivity scale を援用し、日タイ語のデータを基にそれを詳細化すると共に、両言語の対応関係の様相がその scale のどちらに偏るかによって特徴づけられることを示した。第三に、一人称代名詞の形式間の使い分けに、日本語ではいわゆる「役割語」の機能が、対照的にタイ語では話者の対者との関係の指標の機能が主要因としてあり、それぞれが独話的・対話的とされる両言語の特徴に合致していることを、補助的に漫画の対訳データの分析も加え究明している。最後に、本研究は全体として、日タイ語の話者の指示方略の違いに通底する原理に、両言語の事態把握の傾向の差があることを明らかにした。</p> <p>本研究で指摘された自称詞使用の要因の、話し言葉を含めた資料においての検証や更なる要因の解明など今後の課題として残る点もなしとしない。しかし、事態把握の通言語的多様性を分析する認知類型論において新たなデータを提供し理論を更に展開させた点</p>			

など、客観的な手法により新規性に富む成果を上げた意義は極めて大きい。このことは、論文執筆者が自立して研究活動を行なうに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。